

敵討襪樓錦

作者 文耕堂 三好松洛

上卷

二十寸面白の秋の都や。筆に書くとも及ばじ。東には祇園清水。金落ちくる瀧の。音羽の嵐に地主の。梢もちりぐ。西は法輪嵯峨の御寺。廻らば廻れとナホッソ舞ひ謡ふ。先斗町の貸座敷備後の國の一城主。入江殿へ抱へらる藝妓舞子の下稽古。河原面の小座敷を樂屋にしつらひ。音締の絃も御手洗川の波の鼓のどうど。うと。太鼓の音も笛の音も。比叡の嶺風吹荒み心。浮立つ風情なり。旅宿の主春。藤助太夫今日は舞子の下見とて。若黨佐兵衛が花生に輕うあしらふ投入

の。菊の一輪尻輕に。書院座敷のはき掃除心利して立振舞ふ。舞の稽古に性根奪はれ口三味線を高々と。立出づるは助太夫が次男助太郎。顔も心も面長に。百の口をば卅ばかり。フシ年に不足はなかりけり。ヤア。若旦那親旦那は最前御持病が發つて。腰が痛むと仰しやつたが。些お快うござりまするか。親父の佛師快氣く。また仇口を仰しやるか。佐兵衛が聞いては大事なけれど。障子一重彼方には。舞子に附いてゐる目口かはきの者どもが聞いたらば。親旦那は勿論國許にござる兄御。治郎右衛門様までお顔が汚れる。重ねて乾度お嗜みなされ。こりや佐兵衛滅

相な事云ふなやい。故事來歴の無い事を云ふものか。此助太郎を樂特々々と呼ぶ故に。俺作られた親父を。佛師と云ふが誤りではおぢやるまい。ヲ、皆お前のが御尤も。對手になる程白痴の再發。ヤア此泡盛は最前室町の呉服所より。御持病のお見舞とて參つたが。掃除にかゝつてはたと失念。口上の趣はまつかく。コリヤ佐兵衛皆まで云ふな覺えぬぞ。覺えぬ事は書留めよと親旦那の言ひ付。つと合點違はぬやうに違棚。料紙硯を取り下し筆押執つてにじり書。鳥の足形釘の折。フシ甘い和郎には奇特なり。先づ覺。室町の呉服所より疝氣の見舞にあは鳥殿。ハテやくだいたいもない泡盛。さう云ふな佐兵衛腰より下の病には泡盛より淡島殿と。口合たらぐ減らす口。アもう可うござる。此泡盛の口切つて。親旦那の氣齊しに。イヤく親旦那酒嫌

ひ。起きると寐るまで仕事は煙草。萬一今度の疝氣が重り往生の素懐遂げられたらば遺言がある聞いて置け。歌親父死んだら新出煙草で焼きやれのうさア、コレ〜。左様な不吉は云はぬものエ、忌らしいと叱られて、おつと云ふまい。跡の所が肝心要。煙管そとはに立ておきやれとッシ語り散らして走り行く。佐兵衛跡を見送つて。其白痴が親旦那の病の節々岩乗に昔作りの助太夫。刀提げ何と佐兵衛。掃除はよいかと立出づれば。是はしたり。旦那御病氣すんどお快ささうな。先程室町の呉服所よりヲ、聞いた〜。早速に知らせなば禮狀を遣はすに思はざる失禮。斯様に所々方々より音物に預るも。是皆殿のお蔭。一ツには又惣領の次郎右衛門が御奉公を大切に勤むる故。隠居同然の助太夫も尊敬せらる

る。地いで返狀を認めんと硯引寄せつづぶと。文字も心も堅親父。何と言ひ付け置いたる舞子どもは。残らず揃うて居ります。肝煎の傳八呼べ。傳八々旦那殿の召します。あつと答へて立出づる舞子妾の肝煎で。慾に目の無い熊手の傳八。旦那お召しなされますか。ヲ、つと寄れ。扱此中の舞子どもは縹緞も藝も見られぬ〜。先達でも云ふ通り。國許の大奥方より。若殿のお慰みに遣さるゝ舞子。念に念を入れねばならず。肩目形にもお好みあり。繪圖に合はゞ召抱へん。殊に晩程は身どもが朋輩須藤六郎右衛門組下彦坂甚六など。殿の御用に就いて當夏より京都に逗留。拙者が舞子の下見致さば。共に見物致したいとあつて暮前より來られん。萬事無調法のないやうに吃度言ひつけ。成程々々。今日はおてるかつのいく世とて。今都にて名取の

舞子をお目に懸けます。川東の色里でもづし中相中半中八百屋と。様々の奉公人をひつさらへて。手に懸ける熊手の傳八お氣遣ひ遊ばすな。則ち後に廻しますは深草の少將。御所望あらば放下僧と地辯舌流るゝ川柳の彫雀も暮六ツの時計合圖に須藤六郎右衛門彦坂甚六。家來引連れ。案内乞うて入來れば。硯視押遣り助太夫は〜御兩人。約束遠へず早速の御出忝しいざ先づ是へ。イヤ〜夫は痛み入る。お禮は却つて此方より。扱今宵は日頃の積鬱晴し申さん。地かのものゝと挨拶を互に飾る詞の綺羅。星の如くに燈火の。影にめくれる盃に。ヤ、時移るばかりなり。お客お揃ひ遊ばさば追付け始め申さんかと。伺ひ出づるは熊手の傳八。六郎右衛門ははつと仰天。彼奴が此座にゐるからは執心懸けたるおてるが目見え。憎い仕方と顔見合す

れば彼奴もしれもの素知らぬ振。塵席繕
ふ其中にはや彈出す三味線の。いと異
ある風流舞オトリ華やかなりける次第なり

百夜の計歌

二人車ヲシいたはしや少將は。百夜通へと夕
闇の。笠に降る雪積る雪。戀の重荷と打
擦げ。涙の水柱ナホスヲ解けしなき。暮る
る月日は。小車の榻のはしがきもゝはが
き。よみ盡したる數へ歌。歌一ツとさの
や。人目の關に堰かれつゝ焦るゝ此身が
知らせたやく。二ツとさのや。二人寝
る夜もあるならば其稽しさは如何ばか
り。ナホスヲ其かずくは。如何ばか
り。十はだ三千と數へくゝて九十九夜。
嬉しの今宵や待てば久しき明日の夜と。
急ぐ心も身も疲れヌエヲ暫し休らふ軒の戸
を。たくく水雞か夫にはあらで。小オトリた
たく。鶯の音も冴えてヲ二人連たる鉢叩

き。鈴。佛も元はおもはく。戀路の
羅結んでは。抱いて泣梨の長枕。交さん
したと聞くものを。どうした事の因果や
ら。なまうだく。雨無阿彌陀に。遣はれ
廻つて此様に寒きさんやも厭はずに。修
行の爲の寒晒しといふたりや引込んだ
ナホスヲと飄を。鳴らし通りける。少將
は通ひ路の疲れを嗜す好き慰みとコレコ
レ修行者。自身には三衣を懸けながら戀
を勤むる功德は如何に。△さればとよ御
佛も。御寶女色と説き給へば。取分け情
商ふを誠の戀とは云ふぞかし。二人雨の
夜雪の朝にも。梧子の先のさゝめ言。ね
まきながらの寒晒しと云ふたりや引込ん
だ。客は雨夜の。月なれや。雲霧れ
ねども西へ行く。地夜なく變る枕の中
に誠ありとは逆縁ならずや。二人鉢叩きそれ
はやちよらう。安き女郎の事なりとよ諸
國をてつるで。くゝと打巡つて見ような

らば。色と情の里多し。なまだく。濡文
も落つる所は谷川の。流れに誠もあるな
れば順縁にてはあらざるや。煩惱といふ
も。菩薩提なり。掛けに本来一物無き時
は。佛も。△衆生も隔てはあらし。爰でう
てうて。飲めや語へや一寸先は闇の夜の
道も厭はず少將は。彼の修行者を知るべ
にて語り。慰みヲ申シ行く程に。小町御前
の住み給ふ車の。ヲ許にぞ着きにけり
舞も終れば助太夫眼鏡を取つてコリヤ
コリヤ傳八。此間見た舞子より纏織も
藝も拔群好し。彼の少將になつたおて
るとやらを今一應篤と見たしと。繪圖取
出し控ゆれば。口はつと驚く六郎右衛門。
傳八、夫は老人の夜目遠目の見損ひ。彼
奴は手足不束にてお大名へは出されま
い。なう甚六さうでないかと脇道よりふ
きませせば。△いかにもく。コリヤく
傳八とやら。おてるは最早見るに及ばず

宿元へ追歸し。兩人を爰へ連れ來れと。聞きも敢ず助太夫。メイヤ〜何は鬼もあれ角もあれ。お國からのお指圖に。眉目恰好似るからは。てるより外に見る者なし。二人の舞子は追歸してを早うと老人の。氣の背たてに只今はへと云ふ間程なく立出づる。吹上髪に。大振袖。長崎衣裳に江戸の張。京女房の其中で。一際。目立つ舞子のてる。年もいざよふ月の顔。皆様御免なりませと。下に居しなに六郎右衛門を。見じろりと見たる面ざしの。燈火に耀けば。現を抜かし物云ひたげに見廻せば。堅い親父が眼鏡の淨玻璃。助太夫は一心不亂。ためつすがめつとつくと見合せ。コリヤ〜佐兵衛と呼出し。其方は室町の呉服所へ參つて。此刺符にて爲替金二百兩。今夜中に受取り歸れ早う〜と追立遣り。扱御兩所へ無作法ながら。今朝よ

り病發り殊には老人の儀御用捨に預りたし。代りに悪鈍な奴なれど助太郎をお對手。到來の泡盛一ツ上つて下され。△成程成程御遠慮は御無用。勝手次第に御休息。夜長の時分我々も御息と咄しませう。○それは過分然らば御免。ヤアえい。えい。咄したい事もある。てるは此方へ傳八は。跡より來れと打つれて。奥の一間に入りける。○跡見送つて六郎右衛門甚六に目詢し。兩人一度に傳八が胸づくしを駈と取る。○コリヤ何となされます。○何とするとは大騙の手練者。あのおてる事は六郎右衛門が執心懸け。行く行くは本妻にもと儂に橋をかけさせ。盃するばかりに祇園丸山での出會は度々。どうぞ女房に持ちたいと武士に似合はぬ石山の開帳へ脱足參りの願込にも。叶はぬものはてるが身の代二百兩一兩缺けても成らぬと云ふ。まあ二三ヶ月の其中に

は心當の金もある。外へ目見えはさせぬ契約。今日では連來るは六郎右衛門を侮つてか。是見よ身が刀は備前長光。是を今代なせば二百兩には事缺かぬ。サアてるを取戻す分別せよ。出様が悪いと救さぬと鐙打叩けば。○されば夫には段々の言譯。御存じの如くてるが親も強い手詰り。僅九一人の娘に舞を教へ仕立てしも。急に金にしたいと云ふ。○黙れやい。○そこで我等が吞込んで先づお前のお目に懸けたは。○黙れやい。○所が金が調はぬ。○黙らぬか。○ハテ黙れなら黙ります。△自體儂が内股膏藥。六郎右衛門殿とてるが出會の度々。酢につけ粉につけ思ふ様に骨折賃。取つて〜取刺きながら今になつてぬつべりこつべり。何處も圓うなるやうに思案をしるときめ付ければ。○成程々々六郎右衛門様は強いおせき。お前此様子聞分けて下さりませ。只

今も申す如く貧から娘を賣る思案。買人が賣らうに。賣人が買はうにのお前方に金はなし。黙れやい。口幸ひに助太夫様舞子見たいと仰しやる。黙れやい。口早速お目に懸けたも彼の金が欲しさから。黙らぬか。同じ事をくどくど。おてるを六郎右衛門殿の手に入れる分別せい。口サア跡をお聞き遊ばせ。何處も彼處も好いやうに上分別を申上げう。口サア夫を疾うから云へば可い。如何ぢやくと兩人は、フシをどろになつて聞居たる。口先づてるを助太夫様に請出さすは。親も金受取るは。我等も十歩一敷くは。何ときつい。サア是からが分別の免し事。口ワット心得豆板一粒。口忝兩京のさらばお咄し申しましょ。今宵は御兩所様ながら爰に一宿遊ばされ。夜半過ぎなば助太夫も寝らるゝ所を。お前方の家來衆に言ひつけてるを盗んで立退く

は。何と強いか。サア爰が肝心肝文の大事の傳授。口二言と云ふなと黄な物一角。口ハア是は小坊主から角前髪餘程の成入。借お聞き遊ばせ。時に家内騒ぎ立ち。てるが豫ての忍び男奪うて退いたと風聞させなば。此座にごさる御兩所に是程も難儀は懸らず。約まる所は助太夫お國への言譯に皺腹。何ときつい。口出来たく上分別。聲が高い密にと。謀し合する時しもあれ。助太夫の聲傳ハ々々と呼立つれば。口南無三寶一寸參つてまだ云残した上分別。今度のお禮は角前髪を元服させて下さりませと。掴み面はる熊手の傳ハ、フシきほひかゝつて入りにける。口兩人領き呼き六郎右衛門甚六が家來參れ。アアツと答へて雁助關内何の御用と蹲へば。口今夜は是に一宿し。夜と共にお咄し申す明朝參れと云渡し。口近うくと仕方で教へ兩人が耳に口。こり

や怪うくと叫べば。ないくと頭にて、お請を申し立出づる。口傳八はいそくとサアくとさんと談合が固つて。今夜お金も受取る筈。夫故おてが親許へ一寸知らして参ります。かの女もお前に強い惚れやう。今の相談ぬかまいぞ。必す首尾好うくと、上ばかりは云うて歸りける。燈の影も更くる夜や親の指圖に助太郎。泡盛携へ立出づれば。是はく助太郎殿お手づから御持參。御家來に仰付けはなされいで。手前が持つて來るも。家來が持つて來るも手づから。足で持つては來られませぬ。いかさまはは御尤も。何と御親父もてると一緒にお臥みか。コレ減相なお臥みかとはいかい差合。親父は舞子のねきに屹度張番。さもしい事云ふまいぞと。二八眞顔になれば兩人も。今が旨い花盛りとフシとつと笑へば。口ア、

滅多に旨がるまい。持つて来しなに哉つて見たが。それは辛い泡盛。△其胸をこくやうなが甚六が好物。△お辭儀なしにと引受けく。是は近頃びいどろ猪口。丁と受けて下に置き。△ちと助太郎殿に御内證が申したい。別儀でない彼の舞子のであるが事。彼は外に言交した男があると承る。彼の夫婦妬深く。てるを抱へに来る人あれば。或は生靈となつて取付き。武士町人の別なく取殺しく。なう六郎右衛門殿にも豫て御存じ。△成程々々京中の噂。それ知りながら内證云はぬは不親切。一ツには又若殿に過ちもある時は是以て不忠。生靈の出ぬ内に助太郎殿了簡で。てるをちやつとお歸しあれ。時には親父も御自も命に氣遣ひけもない事。なんと甚六此思案は。是はく。上分別と。△甘い和郎には相應な。甘い工ぞ可笑しけれ。△ア、二人ながら侍でゐて

から臆病な。幽霊殿でござらうが狐殿でござらうが。此助太郎何ともないぞ。アノそしてから滅相な夜の夜中に其様な咄はせぬものぢや。怖うはないが隅々が見らるゝと前へくと膝行寄る。△ハテ其方さへ生靈の對手にならるれば。此方は知らぬ神祟らぬく。最早時刻も丑の時生靈の出る時分と。△甚六が當座の機轉飲みさしたる泡盛へ。蠟燭の火を差向くれば件の酒に燈火うつり。青み切つたる炎の丸かせ宛ら靈火の如くにて。烈々と燃上れば。そりや生靈の魂よと。云ふに悔り助太郎。あつとばかりに周章狼狽き五弊わなく。黙ひ出す。生靈の魂より我が魂が抜作と。△し知らぬうつけぞ笑止なり。△△怪顔にて六郎右衛門鏗元寛げ空擬勢△△、胸苦しや堪難や。此甚六に一念が取付かうとは胸怒な。赦させ給へと走り寄り。△色燃ゆる泡盛一息ぐつく

と飲干せば。△扱こそ生靈取付いたりと助太郎は猶仰天。滅多に傍へ寄るまいと逃廻る。△髪切見だし甚六は。まへじやうもんに兩手を置き。△エ、怨めしや腹立や。おてると吾が其中は。△ハハ、變るまいぞや變らじと誓の詞日に三度。△夜は比翼の其陸言に交す枕の濃い中を。身請せうとは胸怒な。△ハハ、やりやしませぬぞ手に懸けて取殺さいで置かうか。サアてるを渡すか渡さぬか。返答に依つて目に物見せんと。△座敷の疊ばたくく。△なう恐ろしや悲しやと爰彼處に迷屈む。△機轉利して六郎右衛門腰障子をぐわたくく。わた。板縁戸襖どろく。△其處よ爰よと迷ふ助太郎を取つて引敷き甚六が。天井に向つて吐く息は。△酒臭うして胸悪し。△ア、赦して下され魂魄殿。俺が知りもせぬ事をこりや胸窓の元祖ぢや。たつた今おてるを渡さう。△おてるを

渡せば言分なし生靈もはや立去ると。うんと仰向に甚六が。武士に似合ぬ所作事はフシ仁辨頂ねて見苦し。〇仕済し顔に六郎右衛門正氣を付けよと抱起し。逃に水も幸ひと又どぶと酒注懸け。草臥休めとぐつと干す喰ひ抜けやら尻抜の。

〇助太郎は色着ざめてるを盗みに差足拔足フシ奥の間へ走り行く。〇二人は顔を見合せふつと吹出し扱甚六。生靈の頓作にて日頃の願ひ今宵成就。おてるが首尾好う手に入るはほんの濡手で泡盛の。旨い仕懸を旨々と助太郎は理不盡に。てるを引立てこれく二人。親父が廢た間に盗み出した命代り。どろく殿にやつてたべと。〇聞聞程不審の晴れぬはおてる。私に合點もさせずにはままあ二人様。〇何にも云ふな六郎右衛門が吞込んだ。此方へ來れと引立て出でんとする所へ。助太夫飛んで出で。須藤六郎右

衛彦坂甚六待て。殿のお腰間へ召さるゝ女奪うて退くかと聲懸けられ。〇最早一生懸命と間近く来るを六郎右衛門。振返つて抜討に切付ければ。〇心得たりと刀の鞘にて丁と請け。拂うて付込む後より。

彦坂甚六是に在りと肩先より脊中まで。したゝかに切付けられ。老人の助太夫かつばと鞆ぶを起しも立てず切殺すを見ながらうろく助太郎。頻ひ駈くばかりなり。〇合圖を待つたる二人の中間音に驚き駈着け仔細聞くより。爰は我等に御任せと助太郎が兩手を取る。△ヲ、出來した其奴も腰骨の立たぬ程踏みめし跡から來いと。〇艱ひ駈き逃屈むおてるを引立て二人は。フシ行方も知らずなりにける。〇阿呆の辭に助太郎大聲上げ。コリヤヤイ大事の親を斷りなしに殺して。せめて葬禮になと出をらぬかと飛出づるを。〇關内雁助息の根を止めぬかと

取つて投げ。踏付けく踏付けられ。下の抜けた其上に骨も手足も踏碎かれ。〇主人の御用の金受取り立歸る若黨佐兵衛。かくと見るより飛びかゝり二人が首筋引摺み。〇何故に若旦那を手込にするぞと。左手右手へ蹴倒せば。〇合點とするりと抜き。兩方より切懸くるを飛退り抜合せ。雁助が物相天窓頰懸けて切下ぐる。

こは敵はじと逃行く關内。袈裟にすつばと切放せば。二人は敢なく息絶えたり。〇仔細は如何ぢや若旦那と立寄り見れば主人の死骸。ヤア南無三寶は何者の所爲ぞと。立つたり居たり氣も狂亂。〇ウ扱は須藤六郎右衛門彦坂甚六が所爲よなど。〇問へど答へず痛く泣喚く。〇エ、如何に愚鈍に生れたとて。現在親御の討たれさつしやるをよう見てはござつたぞ。中間小者もをり合せぬかせめ

て佐兵衛一人むば。地かく暗々とは討せまじ。國へ歸つて次郎右衛門様に何と言

譯詮方なく。メナ泣くく死骸を取納め。

おのれ兩人本望遂げいで置かうか。逃延びぬ其内に。地早うくくと助太郎が手を取つて引立つれど足立たず。是究竟と

竹縁を手頃に押し折り杖柱と。すがれどよろくたちくくかつばと轉べば。

口エ、腑甲斐ない御所存と。地佐兵衛が脊中を馬乗物。コレ負れるに杖は要らぬと引奪れば。杖をついたらちつとなり

とも早かるがの。コレ其心故親を討たれ。のめくと泣いてばかり居さしやる

と。地我も催す秋雨に。ばらく雞の告けわたれば。夜もはや七ツ建仁寺の陀羅尼の音。口負うたる主人も鐘の音も。

二たらぬくと突く杖に跡をし。た。うて三三

中之巻

幾八千代國富み。民も豊なる。入江殿のお城下侍町の弓小路。角屋敷須藤六郎右衛門隣は春藤助太夫。裏は五の奥座敷相の中垣隔てても昔よりある境目の。

相合井戸の相違ひ他生の縁は深けれど。釣瓶要らずに汲む水の。柄杓のえにしぞ常ならね。君もお國にまします菊の御

祝儀日。春藤助太夫御用について上京の跡。惣領次郎右衛門城より直に御家老以下。御禮廻りの留守の内。末子新七まだ

部屋住の徒然や。小坊主に矢取させ楊弓に響を射はらず。隣は須藤六郎右衛門。其

身は都國元は母に預けて置く霜と。いうて十五の妹の纏緖も好うて賢うて。知らぬは男の肌ばかり。縫針讀書琴も弾き姿

は花の菊かさね。菊の節句の雛飾り召遣ひの女の童。出入の者の嫁娘寄集り。献

いつ押へつ口菊酒の微酔紛れ。晴のおやなが頭取つて。何と皆様。此内裏上臈を

乗物に乗せ。お霜様ちやと嫁入事せまいか。是はよからう。地お興昇はお勝女郎おつや女郎。此方を媒人わしや宇領。遣子

も忘れずに乗せうぞや。サアよいわお興参りやはいくくと。お庭の内を

幾廻り。めぐれやめぐる。菊の盃酒機嫌いさ君しらすの矢づくろひ。一心不亂に狙ひを付け百手に心碎きしが。何とか射

けん南無三翳をすつと外れて垣を越し。狙うてはよも中るまじ隣の菊の鉢植の。花をすつばと射切つたり。驚く女中ちぎ

れた花をとりく口々こりや狼藉な。且那樣のお留守女ばかりと侮つてぢや

の。假令花に中つたりよこそなれ。お霜様に矢が中つたら何とする。重ねての爲ぢや表から使を遣つて。地吃度付届けした

がよいと喚く聲。新七迷惑氣の毒さ小坊主に吹込めば。庭に飛降りつる／＼と豫て登りや習ひけん。身輕に立木を遣上り。是から申上げます。此方の新七様揚弓稽古の矢が逸れて。ひよんな無調法堪忍なされて下さりませとござります。アレまだ踏付けた。堪忍せいなら袴着て。表から乾度訛言したがい。垣越に内を見透して何ちやの。尤もな事ならぬ。ヲ、ならぬと。尤もながらはしたな。ハテ騒がしう云やんなと氣の優しいも纏綴程。お霜靜に庭に下りコレ坊。今の逸矢は新七様の業ぢやの。堪忍せいならしもせうが。訛言の言人が小さうて氣に入らぬ。お主様が顔出して仰しやつたら。堪忍せまいものでもないとお霜が申しと降りて云や。長つたと飛降りる下に新七待受けて。聞いた／＼直に訛言申さんと。地間の井筒

の隅踏へ。上るも足のうら若きまだ十八の角前髪。垣の屋根に手を支へ。手前定まらぬ稽古の矢先。大事の花を損ひ迷惑無調法。申上げう詞がない眞平御勸忍。アレまだ人を踏付けた。粗相しながら高い所へ上つて。横柄らしい訛言爰へ来て。一口堪忍せいと云はれぬか。是は御尤も重々の不調法。然らば表へ廻つてお玄關から乾度お訛申上げう。アレまだ踏付けた。爰でなされた不調法玄關が知つた事かえ。薬山繁山しげけれど思ひ入るには障ない。此笹垣をつい破つてつゝ潜る事は叶はぬか。參るに手間隙入らねども。夫も踏付けたにはなるまいか。兎角お氣を有むる爲然らば左様仕らんと。人は何とかいひなはを押しくつろげ。是も訛するうきふしや笹の中垣ぐつ／＼と。引分け番分けつと潜れば手を取つて。コレ申しお前はよう私が。大事の

花を射切らしやんしたの。夫程憎うござんすか。憎くば花よりも私を射殺して下さんせ。是は術ない何しに憎う存じませう。そんなら可愛うござんすか。あいまあいで御座ります。其段は追つての事差當つた不調法。堪忍すると仰有つて下さりませ。イエ／＼／＼眞實可愛いと仰有らねば。何時迄も堪忍せぬ。其は迷惑そんなら可愛うござります。可愛い者が毎度々々遣る文の。返事は何故さしやんせぬ。サア返事は落散つて見る人の遠慮。イエ／＼おしやんすな落散つても大事ない。此方の母様お前の母御様へ文を以て。私を新七様へ進ぜたい。冀うて下されば内證極め。御家老用人衆まで伺うて。誰ぞ仲人頼んで表向から。本式の縁が組みたいとの其お返事。次次郎右衛門に申聞かせ。悪うお返事は申すまいと。内證大方濟んであるげな。ナウ皆の

衆さうかや。衆さうともくこんな好い首尾又とない。ソレ昔の忍びの段今此粹な世の中に。コレお霜様コレくと仕方て教へりや合點して。どうもならぬと、抱き着く。それ此方も同然と互に緊めつ緊められつ。菊の下露打潤ひ。サア嫁入事仕當てたと。大勢中に取巻いて、オウ娘の。部屋へぞ押遣りける。禮を了うて立歸る春藤次郎右衛門。お目出た酒のちよびちよびも。積りて我が身の酔となり。座敷へ来るも、千鳥足。奥覺悟しやもう堪らぬ。とは何となされたと驚けば。酔うた。盛殺された覺悟しや。何をとつけもない事を。今日は九月の節句祝日。取分けて氣に懸る忌しい事御意遊ばすな。どれ社村も脱がせましょ。お煙草も上つて酔をお醒しなされ。豫て深うも上らぬ酒。何方がお盛なされたぞ心もない。ハテ何方といふ敵はない。お城

の御祝儀申上げ。直に御家老白山四郎右衛門様へ參つたれば。よくこそ早々の禮至極忝い。サア通れと四疊半の小座敷にて。お盃を下されお強ひなさる。ま一献喫へますれば四献ぢや御免あれ。四献ならば四献にせい是非も一つ。夫では死にまする。死ぬる面白い殺すくと御意なさる。死んで退けうと四献下され。直に篠崎四五右衛門殿で又強ひられ。澁谷志津馬殿で暫く休み。柴田支伯でとどめを刺されて了うたわ。ア、氣の毒な頃お主も。四の字いふ事嫌ひながら。今日に限つて厭がる程繰返し御意なさる。もう拜みますく。仰しやつて下さんすな。誤つた物申すまい死んだやうにして居よう。アレまだいのと氣に懸けて。厭がる程いふ深ざれも。日頃仲好き。餘りかや。兄の歸りを新七が白地ぞましの戀衣。染めてくやしききぬく

や又の逢瀬を何時くと。歸り滑る笹垣の。影をちらりと見る兄嫁。コレ戻るまい悪い。折が悪いと頓狂聲。聞取る弟知らぬ兄。コレ女房ども折が悪いとは何の折。いやそれはいやそれはとは。サアそれは母様奥にお轉腰。お料理も未だお風呂も沸かず。お戻りの折が悪いと。心で思うたをひよつと申した事。けうとげな。お咎めなされやう。さまでのお酔でもなささうな。お留守の内に執成して申せと。お前への願ひ事お聞遊ばせ。別の品でもない隣屋敷のお袋様。お霜御寮を新七様へ進ぜたいと豫ての戀聲。此方の父様母様も幸ひと思召され。新七様もお厭でなささうななれど。お前の心を量りかねて片付かぬ。尤も次郎右衛門の堅い氣では助太郎を差置き。新七に先へ女房持せては。道が立たぬなどと云はれうとも。其段は此母が吞込んで云ふからは。

些とも苦うないと此譯をよう云聞かせ。

兄の得心召さつたら嫁に貰ひたい。今日
是を云出すは。幸ひ父様御用について。

京都に御逗留の内云うて遣り。心用意も
させましたいと母様の思召。外に障る事

さへなくば。得心なされて進ぜられた
ら可かりさうなものやうに。私も存ぜ

られますと語れば新七我が身の上。是は
是は兄嫁御いかい御苦勞。したが餘程恥

かしいものではあると。垣にひつしと身
を寄せて。小うなつてぞ忍びける。

次郎右衛門機嫌好く。ハ、何事の願
ひかところ思ふたれ。娶る時は必ず父母

に申すといふ。御両親が御得心其身も厭
と云はぬ事。次郎右衛門否と申さぬ。隣

にさへ別心なくれる所存に極らば。
願うてもない掣男。次郎右衛門も殊の外

悦びますと申上げ。心の儘に御用
意させましや。ハア酔醒で頭が重たい些

寝よう。母のお目が醒めたら起しや。

お目に懸つて物語らんと常の。居間
へぞ入りにける。女房嬉しき飛立つた

かり。サア新七様此間にちやつと戻つた
戻つたと。呼ばれておづ／＼還る笹の

糞分の胎内潜り。何時の間に潜り習うて
あの巧者な事わいの。よいやく／＼新七様。

ハテわけもない面目もない。御沙汰な
しに頼みます。頼む事も何も要らぬ。互

の思召す儘に埒が明いた。よう掣様ちや
と／＼戯れの。折もこそあれ若黨伊兵衛

申し奥様。只今京都より佐兵衛がお供
仕り。助太郎様御歸りと云傳ふ。それは

嬉しや次郎右衛門様お袋様も起しまし
よ。新七様はお迎ひにと。悦び勇み誰々

も疾しや遅しと出迎ふ。助太郎お
歸りと我でに喚いて。内入のよいほやほ

や笑ひ新七腰屈め。兄弟者人お歸りなさ
れました。エイ弟者人健康で好かつたの。

母者人より戻つたなと何故いうて下され

ぬ。ちと持たせ振ぢやの。ホ、ホ、次
郎右衛門あれ聞きや。京の水でいよ／＼

阿呆の垢が取れた。コリヤ助太郎親父様
も一緒にお歸りなされ。直にお城へでも

お上りなされたか。但しはまだ御逗留で
其方ばかり戻つたか。親父様とは御親父

の事か。サア其御親父に就いてな佐兵
衛。たつた俺一人それは／＼危い所へ。

よう戻つてくれたな。母者人悦んで下さ
れお神酒でも上げさつしやれ。悦べ

なら悦ばう。お神酒も供へう。親父様
は跡に残つて其方一人戻りやつたの。京

に變る事もないか。ア、變る事ござらぬ。
京の女子は違つたものぢやと豫て聞いた

が矢張女子ぢや。扇開いて舞ひますの謡
ひますの。奴が尻は寒曝し。お姿の顔は

皺だらけ。と云うたら引込んだ。それは
それは面白い事であつたな佐兵衛。ア、

助太郎よ疎ましい年にも恥ぢよ京に變る事もないかと云ふは。親父様の事ぢやわやい。それにこそ曰く段々有馬山。どうで二七日程湯治せずば此痛は治るまいと。

片言やら口合やら次郎右衛門むくりを起し。おエ、助太郎餘程に盡せ。ヤイ佐兵衛。何で俯向いて押黙つてばかりゐる。親父様は如何ぢややい。ハア申上ぐるも面目ない。今度殿様の御用御注文の趣に叶ひ。召抱へらるゝに極りしてと申す女は。豫て須藤六郎右衛門馴染を懸けし藝妓。殿の御手に入る事を憤り。彦坂甚六に心を合せ彼の女を奪取らんと。親且那を騙し討にヲ、それく。御親父は切られてちやそれはく。酷たらしい。と云ふ助太郎を押退け引退け。佐兵衛の中に取巻いて。おシ、シテド、如何ぢやく。其節拙者呉服所へお使に参り。立歸つて見れば須藤彦坂が仲間小者。助太郎様を

手込にし散々に踏打擽。何は存せず彼の家來二人共眞二つに打放し。サ、さあそれは聞かいでも可い。スス須藤と彦坂はナナ何としたやい。イヤ兩人は彼の女を連れ。直に逐電仕り。在所知れずと聞きも敢ず兄弟思はず目を見合せ。ハア是非もない新七。せめてお身か我が一人附いて居たらばな。サア、來い弟用意せん

と疊を蹴立て奥に入る。母も途方に暮れながらコレおはる氣の付かぬ。用があるらう奥へ行きやいの何をおろくしやるぞと。云ひつゝ我も、おろく、涙の堪りかねて伊兵衛佐兵衛が鬚引揃んでぐつと捻伏せ。ヤイどう腰拔め。家來五人十人切つたと何になる。何故雲の上海の底までもぼつかけて。須藤彦坂を討たぬやい。何何面目に生面下げてよう戻つたな。おのれが女房は身が妹縁を組んで悔しい。俺が面まで汚れたわい。大腰拔め

と抜打に。恥知らずめとはたと打ち卑怯者めと丁ど打つ。ヲ、さう思ふ筈道理。サア打てく。せめて次郎右衛門様か新七様か。お一人附いてござらば云ふにや及ぶ。直にぼつ懸けて討に往けども。何を云うても心懸かな助太郎様。打叩れて足腰は立たず。片息になつてござるを見すく見ながら捨てゝも往かれず。アアまゝよ。腰抜になつて助太郎様を國へ連れまし。此段を申上げてどん腹かつさばいて。死なうものと分別は据えてゐる。其方今聞いてさへそれ程口惜がるもの。其座に居ての其無念。伊兵衛思ひ遣つてくれと。大聲。上げて泣きければ。ム、まだしもの事よく云つた。生きてはわられまいサア腹々。伊兵衛介錯頼み入ると押肌脱げば。母は驚きやれ狼狽者。子供が一生の大人人の家來も我家來にしたい時。犬死して主に手をつかする

か。供して力にならうとは思はぬかと。縫り止め給ふ所へ。次郎右衛門新七股引に脚絆引締め。はんちや合羽の旗扮装兵糧の器腰に引付け。助太郎が旗の具掛け立出づれば。妻は三方殿斗土器敵をうちくりよる昆布。腰元に酌取らせ。給仕の座に控ゆれば。次郎右衛門助太郎が手を取り。上座に直し飛退り。兄助太郎殿へ申上ぐる。父の仇は俱に天を敷かず一日遅なれば一日の不孝。須藤彦坂が所在を尋ね。早速討取り父亡魂に手向くる爲。只今お供致し打立つ所存旅装束更められ母人にもお暇乞。目出度く門出のお盆御頂戴なされ。御尤も存じますると手をつけば。ハ、ア母者人あれ見さつしやれ。俺を見者人というて兄貴が芝居事をやるも。さらば返答仕らうか。いかにも弟が申す通り父の仇にはちんぷんかんぷん。やい／＼ぬくめ黙れ。扱も

扱も情ない。あれが汝が目には芝居事と見ゆるか。どんな薬呑ませたら消ろぞい。物云ふまい黙つて居よぞ。コレ次郎右衛門。助太夫殿のお指圖で。幾年か其方を兄にし。あれを弟に仕替へて内外濟んで來た事を。何と思うて今日改みやる。ム、聞えた。扱は其方と新七は妾腹で。ほんの兄弟助太郎は此母が産んで。其方衆とは種一ツ。腹異りの兄。さればこそ親の頭字を取つて助太郎。其方は次男の次郎右衛門なれ共。入替へて其方を兄にして置かつしやれたは。配偶の深い御所存。其父御がお果てなされたれば。母が心にいしふしの繼母根性も出來ようかと。思うての遠慮ぢやの。それは難面い。尤も腹は貸さねども。此方も新七も忌の内から我手で育て。助太郎同然に最愛さ大切さ。隔てる心は微塵もない。遠慮せずとも矢張此方兄になつて。阿房が行

末を頼むぞや。殊に大事の敵討あんな者連れて往て。まさかの時の足手纏ひ邪魔になるは見えてある。捨て置いて往て下され。コリヤ助太郎慮外な奴の。いつもの通り兄の次へ直りをろうとありければ。母人それは悪い御合點。腹異りの背異りといふ些細の穿鑿所ではござらぬ。親父様が存生なればいかにも今までの通りで濟めども。お果てなされた跡。新七も私も親と敬ひ尊ぶ人は、助太郎殿除けて外にはござらぬ。此事に於ては甲が舍利になつても。改めねば我々が天罰身の冥加が恐ろしい。是ばかりは母人幾度でも御意を背き。御惣領ににてます。弟出來た天晴の侍ぢやな。有るなら何ぞやりたい。サア今日から此助太郎は御惣領ぢや。ヤア惣領ぢや／＼京から戻つた惣領ぢや。錢はもどり／＼。やい／＼。まだまだあだ口叩くか黙つてはるを

らぬか。すりや如何あつても兄を兄にするぢやまで。ハア是非もないそんなそれは鬼も角も。其方の望の通りにしようが。敵討に付けてやる事はいかならぬぞや。それはどうした悪い御所存。

兄を兄に改むるも助太郎殿に初太刀を討たせ。ア、コレ云やんな。初太刀を討つとは人らしい者の事。情なや佐兵衛が話を聞けば。彦坂須藤が家来といふは仲間小者。町人同然の一本指それにさへ踏叩かれ。指いた刀に手も得懸けぬは。阿房ばかりぢやない生れ付いた臆病者。須藤彦坂に出逢は。嗚や未練卑怯な恥さらし業さらし。一人でもある事か二人の敵討たうとしたり。兄を助け庇護はうとしたり。兄弟の衆の其時の足手纏ひ。口で云ふやうな事であらうと思やるか。祝ひは申納めじめに心引かれて。萬一其方衆に不慮の事もあつたらば。其時の悔み悲

しみは如何ばかり。髪をよう合點して阿房が事は構はずとも。其方衆ばかり土を穿ち草を分け。所在を捜し首尾好う敵を討つてたも。親に離れた悲しみさへあるものを又其上に重ね。苦勞をしやる

いとしやとエテかつばと伏して泣き居たる。次郎右衛門涙ながらお心遣ひお慈悲の詞。身を粉に碎いても報じ難き母の御恩。さりながら又其上を御合點なされ。助太郎殿を跡に残し我々ばかり。假令敵を討果せてもあれ見よ。春藤助太夫が三人の子供。二人は健氣に敵を討ち一人は跡に残りし。臆病者大腰拔と世の嘲り。助太郎殿一人生人中の交りならぬのみか。末代までの家名の恥辱。冥途の父の魂魄まで恥面かゝせまするは。如何にしても口惜しい。我々ばかり参つては孝行却つて不孝となる。御同道申して敵にお出會なされても。働きも何も要らぬ。春藤助

太夫が惣領助太郎。親の敵遣さぬ是ばかりで日本一の大手柄。跡は我々受取り些とも足手纏ひにならぬ。是非御同道仕ると、事分けてぞ意地張りする。此上は力なしにかにも供をさせうぞと。旅の装束取持つて。立寄る振に助太郎が指添すはと抜く手も見せず。左手の脇腹ぐつと突く。あいたくやれ人殺し。佐兵衛藤の丸買うて来いと。わめきながら手足をあかく。是とはいはる嫁新七伊兵衛佐兵衛も仰天すれば。次郎右衛門詰懸け。餘り呆れて物が云はれぬ母者人。こりや如何でござる。ハテ供をさするわいの。供とは。サアサア。其方衆とは道が違うて。是は父御の冥途のお供さすわいの。さぞや次郎右衛門の心に。面當な事をすると思やうが。願うた後生も徒になれ更々さうで

ない。段々と事を分けてくゝめるやうに

云うてたもる。此地中でさへきよろりく
わんと手悪戯ばかりして。時々虫腹の發
るやうにつくしをる。思ひ廻せば廻す
程。大事のく敵討に附けてはやらぬ。
やらねば家を大事に。尤も至極な詞に
背くやられはせず。所詮此奴がある故と
思ひ諦めて突殺す。母が心が眞の心であ
らうと思ふか。他人の子の利口なより。
阿房の我が子の可愛いは親の習ひ。心は
氣違ひになつてゐるわい。今母に殺さ
るゝ此死を京で父御と一緒に死んだら。
何ぼ程嬉しからうと思ふぞ。死んで冥
途へ往たりともよもや父御が好う來た。
出來しをつたとは仰有るまい。ひよつと
勘當でも受けたらば。極樂へも地獄へも
得行かいで。三途の間に迷ひをらう。夫
が可哀い〜と。初めてわつと泣口説き。
スエ搔口説く。母の誠を引く血筋臨終の
臍にや徹へけん。すすりや俺は親父様の。

冥途の供をするのぢやの。ア、冥途の供
といふものはいかう痛いのぢや。術な
い〜。とても往く供ならば。追著くや
うに地早よ往かうと。きり〜と引
廻す。アレ〜誰も聞いてか立派な事
を云うたわいの。もう物いふな取亂す
な。其一詞が釋迦如來の。一代説法の
お経より貫うて。成佛するぞ南無阿彌陀
佛〜。南無阿彌陀佛と引廻す。劍は則
ち彌陀の利劍日頃の阿房を斷切つて。最
期に利根を現せし。武士の胤こそ恥か
しき。各々はつと絶り泣き中にお春が
繰言の。思へば先刻の四つ字盡し滅多に
心に懸りしは。父様や助太郎様のこんな
前兆であつたかと。泣けども〜。ツシ果
しなく涙に。限りなかりけり。母は亂
るゝ氣を取り直し。サア〜兄弟の衆。
助太郎が此世に居ぬからは。世上の誹も
遠慮もない。お春には母が附いてゐる。母

にはお春の附いて居やる跡に案じる事は
ない。うちにつこりと笑うて門出目出
たる歸りを待ちまする。ア追付け吉左
右申上げんいざおさらば新七來いと立出
づる。何時の間に伊兵衛佐兵衛袴はせ折
つて身輕に持へ。御供と引添うたり。御
とは誰が供。現々儕等は物に狂ふか。身
に附いて來て留守の内。母の介抱は誰が
申す一人も供叶はぬぞ。夫は近頃お情な
い。お主も相傳家來も相傳。譜代重恩のお
主の敵を。討ちにお出なさるゝ主のお供
に外れて。我々が一分立つべきか。御跡の
御用御介抱は我々が女房どもが承る。是
非に御供と聞入れねば。コリヤ兩人目の
前の事に氣が付かねば。彼の曾我の十郎
五郎。親の敵祐經を討たんと御狩の假屋
へ忍び行く。鬼王三郎といふ二人の家
來御供と望む。老母の介抱頼み入ると一
人も召連れず。兄弟假屋へ忍び入り思ひ

の儘に敵を討ち。名を千歳に耀かす曾我殿原には及ばずとも。我々も兄弟家來も二人。召連れざるは昔の吉例。但しは供をして吉例を背くか。サア返答せいと一句の理窟に遣込められ。然らばせめて國境まで。ヲ夫は勝手にせいサア來いと。立出でんとせし所に申し御兄弟。先づ暫く隣屋敷の垣越に女の聲。今日此方へも京都から家來が歸つて承る。申したい事もあれど故と申さぬ。悲しみは妹のお霜。親の敵の妹なれば新七様。よもや女房を持つては下されまい。今生では添はれぬと。たつた今自害して絶えぬの息の内にも。新七様の顔が見たいと死にかねて。苦痛するいちらしさに爰まで連れて參つた。仇は仇は是。武士の情一目見せて下されまいかと。云へども心おき合ひて。兎角の應へ云ふ人なし。コリヤ弟此期に臨んで何の遠

慮。情知らぬは匹夫の勇面見せて往生させい。南無阿彌陀と口に稱名目は涙。御免の上はと立寄れど交隔つる笹垣の。爰にと云ひつゝ井筒に取付かせ介抱し。互の顔を水鏡。見せたらば新七のいたく。母人おさらばもう往きやるか。女房さらばあいさらば。來いと韋駄天走り隣は娘の臨命終。此方は門出の愛別離苦鬼にも角にも世の中は物思へ。との。春藤次郎右衛門が母女房。兄弟敵を討たんとて出し跡屋敷を差上げ御城下の町端れ。海道筋の蘆屋の軒。世を忍ぶには悪けれど。若しや往來の話にも。子供の噂聞くなり伊兵衛佐兵衛を便りにて。暮して春も來ぬ子供が上に咲く花を何時と待つ間のけしなき。伊兵衛は庭に藁仕事。草鞋草履の作り賣。主従女夫六人が藁に壽命を繋ぎける。是は扱奥に

又お泣聲。エ、氣の毒と塵打拂ひ。次の間に打駭き。其様に引籠つてばかりござる故心の晴るゝ事もなう。御兄弟の上は親且那助太郎様の事まで取集め。兎角お歎きの媒となる。御兩所ながら先づ是へ。ちと人通りも御覽なされ。此間も佐兵衛一緒に繰返し。申上げても聞入ない。萬一御兄弟御武運盡き。返り討にお逢ひなされうとも其取沙汰もある筈。まして御本意を遂げられたらば。日本國が動いて是沙汰猶ある筈。兩方共に何の風説風聞なきは。また敵にお出會なされぬと見えて大事の所。泣いてばかり御座なざるは近頃以て不吉至極。袋様の仰出なされてか奥様が。扱々御未練千萬と。辱しめて氣を慰むればいやなう嫁御は年若な故嗜んでも泣きやらねど。堪へ性のない此年寄がふと思ひ出し。嫁御に問へば兄弟が旗立の折柄は節

季の明るる日。拂餘りの金も少々不足な路銀と云やる故。さぞあらう國を立つて七月餘り。最早それも遣ひ了うて不自由なめをしては居ぬか。小さい時から日を半日何一ツ不自由な目。手痛い目に逢はぬ者。今頃はさぞ心遣ひに身も疲れ煩うては居ぬか。可愛やと思ふたりやはや涙。あの人も泣きやる叱る其方もそれ泣きやる。何時立歸つて此涙泣止ませてくれるぞと。云ふも涙の種となる。物思ふ身の明暮は其身に。ならではよも知らじ。御尤もの御聊ち。我も其心付いたる故大方才覺仕寄申す。行方を尋ね御手に渡し些とも御不自由させますまい。お心苦しう思召すな。ぬいめのみよめも追付け歸らうお供に連れられ。幸ひ一の宮の太々神樂。見物ながら御參詣。首尾好う御本意遂げられ追付け御歸宅あるやうに。氏神へ御祈誓。興

様お勤めなされませう。ほんにそれいの評判のある太々神樂。母様お参り遊ばさぬか。面ホ、面、面白い事ぢやげなれど手前の悲しさに打忘れた。みよもぬいも連れるに及ばぬ。つい此形で参ろかいなう嫁御。ア、みよもぬいも人に屈はれ毎日の草臥。私お供申しませう。笠よ帽子と世話焼けば。ハテ何も要らぬわいの。此方も着の儘サアござれ。エエ折悪い佐兵衛が留守。どうもお供が申されぬ。したが今までのお乗物に勝つて。取り敢ぬ其御參詣を神も結局御満足。ヲそれ〱神は見通しと、参る姿は輕けれど。願ひは重き氏神の宮居に打連れ詣でらる。扱々好い首尾よい時に泣きなされ世話なしに先づお二人は片付いた。此佐兵衛何故遅いぬいのみよも何してゐる。此間にちやつと戻れかしたぶつつき〱仕事片付け。さらば一服仕ら

うと煙管相手に胸算用。先づみよが金は一錢も疵付けずと旦那へ渡し。ぬいめがのでは其内を跡へかうして又其隣りをかう〱して。其跡が是程ある。それと是と一ツにすれば都合是程。それでは月にかうお使ひなされても一年程はゆつくりある。忝いと心の算盤高合せて見る所へ。人に屈はれ頼まれて。外と。内とを千鳥懸ギン褌前垂。引締めて。佐兵衛に連れて立歸る。おやおみよおぬい。兄様伊兵衛殿。佐兵衛様戻りがけにお寄りなされ。彼の方の首尾好う迎ひの人を連れて來たとお知らせ故。斷り云うて立つて歸りました。悦んで下されといつよりも内入よさ。それ待ちかねし珍重々々。佐兵衛戻つてが大儀々々。して其迎ひにわせた仁は。イヤ是に居ります。エ、是は〱遠い所をいかい御苦勞。何が扱手前の商賣。儲ける筋なりや

唐天竺へも参ります。扱爰元のお内儀。昨日見えまして二年切つて五百匁か強て五百廿匁といへども佐兵衛殿が今日わせて是非六百匁なければと段々の斷り。五百五十匁に極め。駕籠も持せて連れに來ました。御手形の文言は近松が書いて置いた。傾城奉公請狀の通り違ひはない。サア御兩人判なされ金渡そと。財布の口を解きかくる。田夫は段々の御了簡忝い。コリヤおみよおぬい。此間に髪も取上げて洗濯物でも着換やいの。イヤく髪を結はしやつても町の風は此方へ向かぬ。

どうで教へて結直さす御無用く。かう證文を取つて金渡すからは。もう此方衆の内儀ぢやないぞや此方の奉公人も必ず甘へた面して逢ひになどござりや一度は赦す。二度目からは見知越により辱を振舞ひます。まつこと逢ひたくば一夜が廿八匁。鴨尻にさへ下さるりや何方で

もござれく駕籠の衆。サアおみよ駕籠に乗りや。もう去にませうと立上れば。ハもう往くやうになつたか。佐兵衛様おぬい様。今まではいかいお世話になりまし忝う存じます。慮外ながらお袋陳へ好いやうに。お執成仰しやつて下さりませ。伊兵衛殿もう往きます。随分違者で

次郎右衛門様新七様のお役に立つて下され。コレもう往くわい。むつかしながら仰向いて顔見せて下され。エ、鈍な何やら云ひたい事どもが胸にたんとあるけれど。一ツも口へ出ぬわいのとわつと叫んで伏轉べど。夫を始め誰々も。何と挨拶泣入つてゝいたはり。起す者もなし。コレ今までとは違ふぞや。大金にせにや成らぬ大事の身を其様に酷う持つて貰ふまい。サア乗りやと駕舁くるめ助け乗せて昇出づる。おぬい驚きコレ傾城屋殿待つて下され。私が身の代ももう渡

るか。定めて一緒に連れてこそと先刻にから待つてゐるに。おみよ様ばかり連れまし私は如何して下さる。勤めするなら一所で一緒にせうといひ約束。サア

金渡して私も一緒に連れて往て下され。ムウ、或程々々。其許の儀は又外に大分望人があつて。もう爰へ見えませう。寶物には花飾れちや髪も結うて美しう。身拵へして待つてござれ。エ、口惜い金が足らいで。大事の代物を外の手へ渡すかい。残念な事ではあるわいと。錢銀要らぬ口先で満足させて立歸る。一合取つても武士は武士互に心耻合ひて。もう往くかともさらばとも云はぬ男に又耻ぢて。女房は猶物云はず兩方詞泣別れ。心の内の悲しさを。云はぬは。云ふに勝りけり。佐兵衛涙を押隠し。サアサア女房。今でも迎ひが見えたらば。つい往くやうに身拵へ。兎角女は髮形。其取上

髪結直せろさ。あゝいと應へ立寄りて。柵の隅から取下し取散したる玉櫛笄。長袖向ふ鏡の蓋取つて見れども見えぬ胸の内心の内の悲しさを。誰にかつげのくし／＼と。涙を直に髪水やナマリすけど。解けど髪よりも。むすばれ解けぬ我が心。メチ兒と夫は其傍に。見て見ぬ振のフれさぞやさぞ。歎心でしほる身の油。ギン梅花の花の露よりも。いつそ露とも。ナホヌ消えなば消えぬ。ア浮世ではあるわいと。胸にと息をつくも髪。ギンかゝれとてやは鳥羽玉のナマリ明暮。千筋百筋とフシ引伸ばされし。親の恩。其教にも一筋に。夫大事と撫馴し。冷夕の。床の名残まで。取集めたる大髻。心の細き元結に引緊め／＼結んでも。顔見交せばしやらどけの。わつと我が身を投島田フシ疊に平伏し泣居たる。

飛付くやうにはなけれど。是非とある故錢持つて迎ひには來ましたが。此方に山家出の後帯がうてきてある。同じくは夫にしたい心。あながち強ひはしませぬと。フシ弱みを見込んでしまいます。ハテ扱此廣い世界後帯の尼も姿もなうてかいの。何と此方のもあれ見さしやれさつぱりと髪も結うて。昨日とは格別遠ぶがや。見直してまあ五百増されぬかい。サアさう思うてぢやに依つて商ひが出來ぬ。此方の商賣は。小さい舟に雨が降らいつでも筈耳いて。とんぎやろ／＼と湊々を漕いで廻る水商賣。室や鞆の女郎屋とは違ふわいの。何ぼ美しう髪結うても。立居に筈で摩れてつい亂れる。亂れた髪で目利せねば大きに當が違ひます。五百は愚か三文も成らぬ／＼か。ハテ是非もない。負けてやろぞ打つて置きやしやん

しやん。さらば寶を渡さうか。此證文に判なされと。投出す鳥目一貫文。時の相場は十二文どうしかけてし遣うても。十五文締ぎる物着て。定めぬ浪の契り賣る。船惣嫁とは知られる。あぬいはいわつと泣出し。扱も／＼恥かしや。とても女子に生れうなら好い纏織になりたいもの。おみよ様も女子私も女子。纏織の好いと悪いとで。五百五十匁銀出しで悦んで連れて去ぬるもあるに。錢なら僅た一貫を海山ほど恩着せて。厭な顔して買はるゝとは白い黒いの違ひの段か。面々女房の身の代でさへ怒う違ふもの。嗚や夫の忠義も違うて。面目なからう佐兵衛殿。それが悲しい／＼と。メチ兒かつばと伏して泣叫ぶ。佐兵衛不便さいや増しに共心は亂れると。エ、未練なり女房。其方と伊兵衛は血を分けし兄妹。悪うても大事ない伊兵衛は纏織好し。彼方此方へ

取替ゆれば可けれど其處が天命。生れ付いた不纏綴が泣いても悔みても今更美しくうなるべきか。と云うて産付けた親も恨みられず。おみよが五百五十匁も汝がた儘た一貫も。現在女房に勤めさせ。其價を主のお役に立てる。忠義に輕み重みはない。悔むな泣くな。なう伊兵衛さうちやおぢやらぬが。いかにも。一貫の錢の價は十二匁。世間通用の秤で懸けたらば十二匁あるべきが。今日此世界を照さつしやる天道の秤では。此みよが身の代も。其一貫の十二匁も些とも輕みはあるまいぞ。よしな事を悔まずとも。地につこりと打笑うて。往てくれたらなう佐兵衛。それ。兄も夫も。何ぼう過分に存せうと。云ふ聲共に咽び入り。前後。不覺に見えにける。是はかゝらぬ。それ程悲しか賣らぬがよい。忌々しい奉公人こちや要らぬ。どれ錢返しや廢しにし

よう。なう泣きやしませぬは見さしやれ。ほやく笑うてゐるわいの。そんなら兄様佐兵衛様もう参りますと。思ひ切つてはなかく。二度と流言云はどこそ。先に進んで立出づる。所へ戻りかけの二人のお主。アレ。見知らぬむさい男が。泣いてゐるおぬいを何處へやら連れて往くわいの。伊兵衛佐兵衛あれ留めぬか。ハアはつと敗亡し譯は云はれずぐどつけば。エまだるいと駈出す。二人の主を二人が引留め動かせず。こりや何故留めること。故せ。イヤ其段はと狼狽ゆる。そんなら放せイヤ御無用と。引留めながら見顔ながら伸上り見れども辻を横切に影も。隠れて

道行對の花鱈

點だ。昨夜も三百張込んだ。裸で道中なるものかコリヤ。コリヤ。ニハアしてこいな。どつこい振れ。振りこめさ。我が身世にふる。花の雨。涙の雨。果てしなき。伊兵衛佐兵衛が忠義より女房々々を故里の。船によるべの苦界ませ他人ならざる舞小男。一文奴と様を變へ。エチ敵を狙ふ御主人に。何とぞ巡りあひの宿。フシ泊り。袖奉加。耕の奴服作り。油けもなき備後の國。フシオチリはや立へ出でて。フシ行く先は。當處も波の吉井川。泳ぎかねたる其日過。木質泊りの糶盡きて。五文に命繋ぎ錢。れずは通ろ。くられたら振るべい。二人もよき。今度殿様のお登りよ見れば。柿の頭巾に尻をでつかいからけて。ヤツシツ。挨拶持ちなヤヨ。生中に。生中似たる俵を。もしは尋ぬるお主か

と。鳥毛ふりさし走り着き。見れどもさうでないく。胸あれでもないか。△ないく。是でもないか。△顔見合せ。△汝は汝で。俺は俺だ。△遠うた。△二人違はぬ物は奴服と互の忠義は一対の。△挟箱持ちなヤヨ。なまなかに。△急げば。△はまる車坂。急がぬ顔でぶらく。と登る兄坂弟坂。親の敵を持ちし身は。△ヒロと俱に天を敵かぬ。古き例もあるなれば。空を翔り地を滑り出逢ふ所は優曇華の。△フシ華々しくも。△切巻くり。念なう本望遂げ給ふ。お旦那達の御武運を。△セツリ祈る心の底。簡男兎原の宮居伏拜み。里とばなれて漢傳ひ寄藻掻く子の聲に。△ミリ歌つらいく。と逢ふ度におしやるのエチヤエ。辛か。引かしましたよ憂き勤め。勤めのことたんでのエチヤエ。△替る。枕は。數々とおしやるのエチヤエ。

替る。中にも只一人。忘れぬ。こんなんでのエチヤエ。△歌ふ一節。△フ川竹の。うき事聞けば可愛やと。△思ひ出したる妻の事。△互に。口に得云はねど云合せたる如くにて。目に洩る涙。△はらはらと。髪は流れてまだら顔。△エチヤ浪々の身を悔み泣き。△空つ腹ちやにがいにしやくるな。△お身ほえな。△悔むな。△歎くな。△二人肌身には。女房代りの此銀を妻と思へばいそくと。△急げば早く。△難波津の町々小路船着を。もし其人やおはせんかと爰の。人立彼處の辻。宿入下馬先押立てる。△躑躅んつけ手先を揃へ。△隙突出してこめさ。△とんく。△蕃椒かつかぢり。△五寒の冬でもかじけない。△ふるや。△ふるく。△故郷をお立ありしは去年の秋。△今ヨリ世上は春と知りながら。我が身の花はまだ咲かで。心を盡し身をつくし。主人に尋ね。△オオ大坂の町に。

下之巻

暫く三々へ休らひぬ。

大和路や。△地こゝにも立てる御社は郡山の町端れ。弓矢神とて武士の歩みを運ぶ鳥居の馬場。家中の面々入代り。馬の庭。△遠乗の稽古數々ある中に。其名も高市。武右衛門が馬藝勝れし身の譽れ。夫に目倣ふ庄之助。親に勝りし器量よし衣紋もよしや大振袖。袴の着こなし潔々しげに年はいざよふ月毛の駒。うち八寸の手綱の習ひ。寄らず脱かずかい繰りく。しとくく。△白泡噴ませ。△ヨリ歩ます。響の音はりんくく。りんと坐りし。△ナホス腰付に。△色と情を懸聲の。△ヨリはいははた。△松虫の。鳴音と優しくしほらしく乗戻し引廻し。めぐる輪乗にくるくく。かつしく。かしく。さらさつと。乗飛びく。△乗飛びす。△ヨリ蹄

に蹴立つる砂塵風新柳の前髪さかり。駒もなづみて肝つよく。鬘振つてナホヌ、胸の聲フッゆしくも亦潔し。武右衛門打笑み此間の稽古に勝れ。腰のかたまり手綱の心得大方に極る。併しいつも云ふ如く習うた手に執着せず。及ばぬ所は工夫をしめされ。ハア、いかにも心得ました。今日は殊の外鞍心も好うござれば。今一馬場せめませう。アイヤ、進む者は退き易し。古来より一藝に能ある者は人の譏り嘲りをも厭はず。只心長う訓練せし故其名を上げる。願のいるは苦しうない。絶えず心懸けるが肝要。今日は稽古も是ぎり神主方で休息し追付け歸らう皆参れ。ないくくと下部ども。馬引連れて入りけり。戀ならぬ義理と情に。繋がれて。人目忍べばおのつから麗かならぬ日影の身。おてるは派手の振袖をとめて目立たぬ町模様目深に着な

す綿帽子。雪も耻らふ手にひやく野風。厭はぬ神詣で。鳥居の元に差懸り。向ふ並木の馬場先へ頬被りせし旅扮装。二人連にて来りしが互に見合す顔と顔。ヤア傳八様か。是は扱おてる殿。エエ、胴慾な人ではあるわい。此方衆の爲思ふ此傳八を皮にして。身ばかり抜けりや濟むかいの。跡のもやくり大抵の事か。と滅相な人をばらして。ア、コレそれを。おつと切つた事は云はぬは。二百兩の身の代を此熊手が横取もしたやうに立いていと親達が突張つて催促。口ついだ悲しさ。待つて下され尋ね出して寄せうと。手摺退歩で草鞋がけ方々と尋ね廻るは。正眞の盗人におひ。路銀も脚もたまものか。サア六郎右衛門は何處にちや。連れて往て會はさつしやれ。早うくとせり立つる。おてるも難儀を推量し成程お道理さりながら。私が方から思は

ぬ男無理無體に連れて退き。厭と云へば殺すの切ると夫も厭ひはしませぬど。厭がる者を命に代へて。思うてくれるはよくくと。ひよつと義理に氣が付いて。馴染めば憎うも思はれず。まあ繋がつては居やんすが。サア其居やんす所へ早う行きたい。サア其處が氣の毒。知らしやんす通りの身の上。連立つて往んでは。ハテ其遠慮は人が違ふ。此熊手が物欲しがらぬ法もあれ。所を見ても人にや云はぬ。サア私こそさう思へ。ひよつと知らせてどうあらうか。エ、埒の明かぬ人もうえい。コリヤ與六。かうせうわい。所詮かの和郎に逢うてから。二百兩が何として。出ぬものに世話焼かうより。ちちが骨折損にして。おてる殿を親達へ渡せば言譯立つでないか。いかにもさうちや。歩まつしやれ連れて歸ると引立つる。後へ來かゝる侍が袴箱

の刀を提げ。此躰を見て待つた。其方は京の肝煎傳八といふ者な。先達様子は聞く。身は加村宇田右衛門というて。六郎右衛門とは悪意の仲。おてる殿の身の代いかにもく吞込んだ。いはと纏の金子。手前が取替へ渡さうが。途中といひ些と急用あれば今は成らぬ。近日身が屋敷へ来て受取れさ。ア、イヤ纏でござりませぬ。これは二百兩の身の代。見ますれば御仁躰と申し。お侍の仰しやる事定めて違ひはあるまいが。其屋敷も存じませず。近日の明日のと延引致すも氣の毒。とても俄に今お金を遣はさるゝか。六郎右衛門様にお目に懸るか。おてる殿を連れて歸るか。三ツに一ツ只今埒が致したい。なう情なや何の因果に口ついではまだの難行苦行。今日見付けたは天の與へもう此上はいかなく。一寸も侍つ事はどうもイヤ成らぬと云うて今

金は持合せぬ。身が請合つて渡さうと云ふからは違ひはないさ。イヤ違ひがなうても隙の入るが迷惑。矢張連れて歸りませう。ハテ扱事を分け云聞かすに愚痴な奴かな。えいは途中の事なり。此宇田右衛門初対面なれば覺束なう思ふも尤も。然らば金を渡すまでおてる殿をわい等に預ける。ハア、それでさつぱり埒明いた。私宿は此郡山の町端れ酒屋から三軒目。丸に井の字の印が出してござります。何時でもお金と引替サアござれおてる殿。そんならわたしや参ります宇田右衛門様いかいお世話。ア、何のく。コリヤ傳八追付け金を持たせて遣る。夫まで預けた大事に懸けい。ア、大事にかけいでは。直に小判のおてる殿。うかくしで驚。引つかけられては熊手が立たぬ。與六ぬかるな来いく。と引立て旅宿へ歸りける。宇田右衛

門一寸遁れの請合も。心當處は匿匿ひし六郎右衛門が所持の刀。賣代なし埒明けんと急ぐ向ふへ立歸るは。高市武右衛門庄之助。これはく御親子共に稽古おしまひはやお歸りか。只今御宿所へ参つたれば此所へお出と聞き。直に些と急用。貴殿御存じの通り此度殿鎌倉御参観につき。幸ひ此刀をお求めなされども。念の爲貴殿にお目に懸くるやうにと仰せられ。夫故持参任つた。ちよと御覽下されいと差出せば。いかにも御發足は近日なれども刀をお求めなさるゝ儀は。此武右衛門會て存せぬ。して其刀は何者が所持致しました。されば手前が懸意に致す浪人。重代でござれども尾羽打枯して賣ります。正眞の寶は身の指合せとやら。備前長光ちやと申す。尤も無銘ではござれどもなか。出來の好い物

さ。イヤ申し父様備前長光ならば銘がある筈。無銘とは合點が參らぬ。ヲ、そりや其方達が知らぬ事。其鍛冶の時の氣に随つて銘を切るもあり切らぬもある。どれどれ殿の御献上とあれば。大切の儀先づ拜見致さうと。地拔放して焼刃鉄色切先物打鐘元。中心を改め眉を撃め。イヤ何宇田右殿。此刀の直段は何程と申すなされば直段は半金三拾枚。残念な事は。隨に本阿彌より取置きし折紙紛失致したと申す。ハアいや紛失迄もなく折紙はござるまい。宇田右殿此刀御挨拶は御無用。とは何故な。ハテこりや正眞とは見えませぬ。卒爾な物を御前へ上げられ。後日に何の彼のがあればお爲にならぬ兎角御無用になされい。ム、卒爾な物と仰しやるからは。扱は此刀ハテ長光ではござらぬ。殊更殿の御献上。鎌倉にて備前長光と御披露あり。目利者に拜見させ長光で

ないとあらば差當つて殿の不調法。其許は御自分遠慮致すは事に依る。贓物と知りながら見通しには成りませぬ。ム、すりや此刀は贓物でござるな。されば焼刃中心の鑢目共よく似せられた。平たう申さば鈍物切れまいと存する。イヤコレ武右衛門殿。贓物なれば切れまいとは御了簡が偏る。例へば宗近正宗が鍛つたる刀も。切味鈍きは用ゐるに足らず。この如く無銘の刀も切れる時は干將莫耶が劔に勝る重寶。もし此刀試し見て。よく切れたりとも御献上にはなるまいかな。そりや此武右衛門が不調法目利違ひと申すもの。ム、殿がお求めなされうとある儀を早く賣主へ申したれば。此儘にも返されず。ハア、何と致さうかと。地金の入用差詰る。刀の吟味に當惑し只棒鞘を贈りゐる。地側にさかしき庄之助。イヤ申し宇田衛門様。其刀の切味御覽あるは易

い事。死罪に極まる科人あらば引出して檢し者。此儀は如何と云はせも立てず。コリヤ、悴何を差出る。死罪の科人あればとて俄の事なり。我儘にはなるまいと。地云ふに氣の付く宇田右衛門それよ。好い事思ひ出したり。昨日春日へ參詣の歸るさ。大安寺の堤に小屋をしつらひをる非人め。小兵なれども中々骨組違しき奴。檢し者には是究竟。地今宵ひそかに立越えん貴殿も誘引仕り。刀の切味お目に懸くれれば利きと鈍きは明白たらん。御苦勞ながらと勸むるにぞ。退引ならぬ證人も。主君のお爲と打領き。ヲヲいかさま左様ござらずばお疑ひは晴れますまい。父子共に是より直御同道致さんと。馬取小者を先へ歸し。いざ此方へと行く空の。夕日も西に入相の鐘に。連立ち三重へ急ぎ行く。春藤次郎右衛門兄弟は首尾よう殿のお暇賜り。須藤彦坂を

尋ねかね。國々廻る年月もはや一歳。貯へに事缺かねども故と非人に奈良坂や。寒風にも郡山大安寺の三昧に。薬の假屋の假初に二月餘り忍び居て。大和一國端まで心を盡し身を碎き。フシ敵を狙ふぞ健氣なる。ハルハる宵月に。稍離れてうたゝ啼く。浮れ鴉のフシ音につれて。立歸る新七小屋の薬戸に打嘆き。申し／＼兄者人申し。ムウ、ムウ誰ぢや。新七でござります歸りました。是は宵から御寢なりましたの。ホ戻つてか。日は暮れるたつた一人淋しさに。つい横になると思つたがもう何時ぞ。イヤまだ五つ半四つにはなりませんぬ。それでも一時半の上寐た。どりや其處へ出て茶を沸いておませうぞ。イヤ私が焚付けませう。ハテ一日歩いてさぞ草臥。釜も竈も知らぬ所へ直して置いた。身が焚付けると立出づる髪はおどろに延び亂れ。顔は髭むく身は苦むし。

思ひに震るゝ兄弟がフシ身の有様ぞ哀れなる。石の竈に土のかま。落葉枯枝をさし燻べる。江竹の火箸の火せりして。何と新七。今日は何方を尋ねてぞ。今日は木津の方から新在家を心がけ。それ故思はず日が暮れました。もう爰の逗留も二月餘り今日まで所在も知らず。其内に萬一敵が病死せば。誰を敵と本意を遂げん。思ひ過しがせらるゝと。エテ涙に聲を曇らせば。ハテ氣の細い若い者。是程兄弟が心を碎いて此敵を討果せぬば。世界に神も佛もないわい追付け討たする。それでも所在が知れぬもの。知れたれば云ふ事はない。かきたくるやうに氣短う思うても。是ばかりは力業にはいかぬ／＼。といへばいかにも討たする。ヲ此次郎右衛門が討たする泣くな。あい。泣くな虫鎮みや。コレ茶を飲みやれ。まにあお上りなされませ。したが茶よりも是

を爛して上りませぬか。是とは謔白か。ヲ、氣が付きました。お初瀬を荒神様へアイタ、夕。後程寐酒に仕らう。申し痛い／＼と御意なさるゝがお怪でもしやなされぬか。イヤ怪我はせぬ。兩足共に腰より下が痛んで。身を動かせばアイタタ、擦りませうか。いや／＼手が觸ると猶痛む。こりや二年以來の風邪の滯りアイタ、夕。申し風邪でも其様に身内の痛むものかいな。さればいの。風邪ひいても早速追出せばかうならねども。上へはひき上へはひき古い風邪と新し風邪が。五體の内て上を下へ。かう／＼揉合ふに依つてアイタ、夕。そんな事ならさうならぬ内仰しやつては下されいで。大事のお身を持ちながら。若し重つたら何と致しましよ。サア云へば苦し病んで其様に泣く故に。でも隠すも事に依るアお薬が上げたいな。ハテ氣遣ひな病ぢやない。

明日でも町へ往たらば收毒散四五服買う
てたも。立かけて呑んだらつい治らう。

イヤ今買うて参りませう。何處へ往て。郡
山の町へ参つて。ハレ途方もない百丁に
除つた道。夜の内に物騒な河原を越え。わ
けもない事云やんな明日の事。イヤ
イヤ收毒散で治る事なら一時も早う上げ
たい。ハテ明日の事にしやいの。イヤ

氣遣ひで明日までが待れませぬ。言ふと
其様に。是非とも往きやるか。ア、太
儀ちやなア。そんなら序に小さい薬罐。生
姜も買うて来てたもれ金やらうか。イヤ
まだござります。石高な道ちや怪我せま
いぞ。ア願はくは明日の事にしてくれい
で。もう往たか必ず急いで怪我すなと。
影見ゆるまで見送り。伸上つては
アイタ、タ。立上つてはどうと坐し。ア
ア兄弟は持つつべいの兄は弟を力にし。
弟は兄を力と思ふ其他が此痛み。氣遣ふ

は理ながら。行戻り五里餘りの道。此
暗いに何者が身にひつかけて往てくれ
う。常住一緒に寄添うて居る兄弟でさへ
此通り。國にござる母人女房ども。今日
は本意を遂げて戻るか。明日は敵の首提
げてお歸りか。待つ精力も盡果て。

此様に便りのないは返り討にも討たれた
かと。尼法師にも姿を變へ。出た日を命
日と申うて居るか。泣いて居るか。不便
便やと漫に。涙ぐみけるが。ハアハ、
ハ、ハレヤレ愚痴な事を思ひ出して。
假令新七が聞かによこそ。これ聞いたら
兄貴の愚痴な事を云はると笑ひをら
う。ハ、ハ、ハ、戻るまで起きても居られ
まい。家主が叱らぬやうに火の用心よう
してさらば臥せらうか。どりや火を消さ
うアイタ、タ。是ではまさかの時役に立
つまい。新七が苦に病むも尤もかいと
獨り言。薬引結ぶ夢結ぶ露も結べば置く

猪の嵐を防ぐ錢引懸け。臥屋にこそ
は入りける。士士の心を志と訓ませ。
士の口を吉と訓む。それには背く宇田右衛
門。高市武右衛門一子庄之助諸共。大安
寺の堤傳ひ。三昧近く立止り。コレコ
レ庄之助殿。最前も申す如く拙者お袈裟
を試したらば。非人めが暖まりの冷めな
い内。おけすへを打放し試みなされ。仰の
通り遊ばした跡。腕なりとも股なりとも
御意にかけられ腕ためしが致したい。ヲ
ヲ流石々々。好いお心掛ヤイ家來ども。
非人めが臥つてをるか見て参れ。長つ
て駈出す待て家來ども。麻ごみを打放
す足音して目を覺さすな。差足ると我が
身の陰に提灯伏せ。落の驚の小鮎を狙ふ。
差足して小屋近く窺ひ寄り。フンとつく
見届け立歸り。高軒かきちらしど臥つ
てけつかります。それ珍重。なう武右
衛門殿。すつぱりと参るか参らぬかお日

御挨拶討敵

に懸けろ。お出でなされと刀押取り先に立つ。なう宇田右殿。貴殿我等が詞の論證する所非人めが不仕合。寐ごみを切るは如何にしても本意ならず。引起し得心させ經陀羅尼の一巻。念佛の一過も御芳志あれ。是は尤も。武右衛門殿の家來も一緒に往て。非人めを爰へ引摺出せとッ聲より早く立かゝり。非人め御用がある彼處へ出ませい。荒立てんも仔細は知らず。只はつゝと引摺られ目通りに畏る。御用がある罷出ませいとござる故罷出ましたが。シテ召します各各様方は。尋ねて憐が何にする用があるツ、つとつと出をらうさ。ハイ。それへ出ませい。ハイ。いやさ出をらぬか。ハイ早う出をらう。ヤイ。こりややい口々に喚いて狼狽さするな。非人用がある其處へ出よさ。ハイ。呼出すは別儀で

ない。無心があるが聞いてくれうか。ハア、見ますればお歴々様非人めに無心とは。先づ如何様な儀でござりまする。聞いてくれうか。身に叶ひました儀でござらば。聞いてくれうな。夜中に我々参つたは。其方が躰軀を貰ひにさ。エイ。驚きは尤も。今日此御方と論じ合ひ検査ねばならぬ刀がある。寐ごみを切るは易けれども。得心させての上と思ひ呼出した。非人躰軀が貰ひたいわい。是は思ひがけもないさりととは思掛けない。非人の儀なれば野倒死にもする躰軀と思召さうが。私腹からの非人でもござりませぬ。一家一門は皆歴々なれども。私所存故勘當受け到頭。非人に成下つてござれども。今一度本の人間に立歸りたいと。朝夕神佛天道を祈りますも命の惜しさ。大切なお道具で非人をお檢しなされては。穢れにこそならうすれ道具の譽れ

にはなりませんまい。のめり死に逢ふまでも死なうと思ふ氣はいかな。只命が惜しうござりますお助けなされて下はりませと。士に平伏し手を合せ。涙と共に詫びにける。幼心に庄之助いちらしとや思ひけん。段々申すを承れば不便な儀。お檢しなされいで叶はずば。近々處刑者もありと聞く。非人が命はお助けと詫ぶるも聞かず宇田右衛門。何さ。氣の弱い。一家一門見限られ勘當受ける。高がろくな奴でない。念佛の一遍も唱へさせんと。慈悲を垂るれば付上るどう乞食め。家來どもあれ引出せ。取つたと寛る身を躰し左手へ擔いで右手へ投げ。右手へ擔いで左手へ投げ。筋斗打たせ投付けられ。赤面抱へて下部でもッ面目砂にまぶしける。宇田右衛門反打ちかけ。慮外者抵抗ひか。眞二ツに打放す。ア、いや暫く。たつた一

言申したい。何の一言聞く事ない。

退れば圖に乗る宇田右衛門武右衛門し
ばしと押し止め。御ヤイ非人汝呑込の悪い
奴。かく大勢が押取巻き逃ぐるとて逃が
さるか。今の如く抵抗ひすれば、つくだ簡
もつかぬなる不調法な慮外者。誤つた
な。とても助けぬ命なれども一言申した
いといふ。其内に卒酬はない何の一言。
サア吐せ何と。成程命差上げませう。
さりながら私は大切な望みある身分。其
望みだけ叶うてござらば此躰軀。お檢し
なされと此方から差上げませう。御了簡
なされ暫く御延べ下されば、生々世々の
御厚恩と低頭。土に平伏せば、其大
切な望みといふは敵討であらうがな。エ
イ。いやさ隠し召さるゝな。非人に似合
はぬ武士も及ばぬ今の働き。願ひを叶へ
うまでの非人と睨んだ眼は違ふまい敵討
ぢやな。ハアお目立ます上からは有や

うに申上ぐる。他言は御無用。成程親の

敵を狙ひまする者でござる。抜こそと
武右衛門。感心すれば宇田右衛門えせ笑
ひ。ハ、ハ、ハ、ハ、大盗人め大騙め。敵討
とさへ云へば陣の虎口も遁るゝ習ひと。
偽りに擬ひない其證據は見れば又物帯し
た物は勿論小刀一本持ちもせず。敵に
出逢つて何で本意を達するぞ。偽り者め
と睨付くる。御不審御尤も。非人に様
を變へたれば人の目立を憚りて。此竹杖
に刀を仕込み置きましてござる。サ定な
らばそれ抜いて見せい。イヤ御覽じま
るに及ばぬ。見せぬはいよく偽り者。
檢してはう家來共それに引出せ。承つ
て驚もせずはつと立寄る鼻の先。すはと
抜いたる双の光わつと戦き膽潰し。跡
退りして片寄りける。青江下坂二ツ洞に
敷腕。ハ、ハ、ハ、ハ、親重代でござります。
地とれ拜見と宇田右衛門近々と立寄れ

ば。いやそれから御覽じませう。敵に逢

ふ事いつ何時も知れぬ故豫て兼刃を合せ
置き。よつく切れますすんと切れます。
是非金味を心許なう思召さば。御家來の
内何方なりとも何奴なりともなハ、ハ、
ハ。敵討に偽りござらぬ。了簡して侍早
くお歸りやれ。宇田右衛門猶根を押し
て。其敵とある生國はと云はせも立て
ず武右衛門押し止め。イヤ、其儀はお尋
ね御無用。非人となつて身を忍び狙ふ程
の志。お尋ねなればとて國所有様に申さ
うか。偽りを聞いて扱はさうかと思召す
も何とやら馬鹿々々しい。子、扱々、
御大望ある方も存せず。慮外の段眞平
御免先づ刀をお納めなされと。抜搦す
れば次郎右衛門、刀を鞘に納めける。
御知行頂戴なり帯刀致せば。我人侍ぢや
と存すれども。武士の中にも御自分のや
うながあればある。近頃侮りがましけれ

ども。少々は是に持合せ寸志の御用に立
てたしと。取出せば押戴き。御親切淺
からねども國を罷出づる時。形の如く用
意任り今に事は缺きませす。御志は受
けたる同然ッ泰しと押戻す。宇田右衛
門もかつつばひ何ぞ挨拶云ひたげに。

其お狙ひなさるゝ敵當地に在りとお聞
きなされ。それ故爰に御座なさるゝか。さ
れば當國に影を隠してをる様子。風の便
りに承り先々月罷越し。尋ねれども知れ
ざる故。明日は又丹州へ立越え申す覺悟
と云へば。庄之助おとなしく。明日丹
州へお越しならば當地の名残も今宵はか
り。是にござつては風烈しう。大事のお
身の痛みも氣の毒。手前の屋敷に一夜
を明し。此方よりお立ちなされて下され
と。慫慂に述べければ。ハテ御發明。其許
の御子息な梅檀の二葉嘸伽の卵。御成人
の後思ひやる。なか／＼此身に馴染みて

寒風素雪も苦にならず。

首尾好う敵を討ち果せ。

今晚の御芳志はゆるりと

御禮申すべし。ハテ扱々

おやさしや殊勝しやと。

子を褒めらるゝ親心武

右衛門悦び手をつかへ。

故と御家名は承らねど

も。御本意を遂げ給は

其時日本に隠れござるま

い。其時は蔭ながら親子

悦び申すべし。今日日の

播磨は明日の錦必ず

身を大事に。追付け御本

意遂げ給へと。世にし

み／＼と述べければ。

宇田右衛門も黙つてゐら

れず我人武士は相互。追

付け御本意遂げらるやう



大義松
大夫竹田新松
座本竹田新松

敵討襷錦

<p>上 須賀 今市 下 丹波 八上</p>	<p>中 丹波 八上 丹波 八上</p>	<p>丹波 八上 丹波 八上</p>	<p>丹波 八上 丹波 八上</p>
----------------------------	--------------------------	------------------------	------------------------

附 書 曆 興 月 九 年 七 和 明

に神佛を祈りませう。お眼申しござらうか。お三人共、地さらばく〜と禮儀を述べ。

別るゝ武士の附合は淀ます濁らぬ川水の

オキ堤。へ傳ひに歸りける。地次郎右衛門

跡見送り初めて吐息ほつと吐き。ヨホ、

危険い命助かつたも。此刀の陰エ、忝い

忝い。是は扱結句跡で。胸が躍ると撫

摩りッシ撫下し。ヨヤア爰でこそ新七が。

土産の諸白仕らうと。看ばかりが缺徳

利に。餘る弟の志ヲ引受け〜。此新

七は何故遅い。地と思ふも無理か五里餘

り。天狗でもまだ戻らぬ筈。地ハア氣が上

つて頭痛がする。寐て心を休めうかと云

うて我は寐もするが。かはいや新七が晝

は一日飛廻り。さらば夜ととも休む事か

さぞ草臥れんかはいやと。地云ふを心の榮

しみに。思ひもみやも果てしなき。オキ

藁屋のへ内へぞ入りにける。地人の身の

こゝこそ終の寄邊なれ。世主知らず人骨

朽ち。獨體名夜して秋の草皆衰へし。數

數の石塔は誰が涙の種やらん。法界無緣

七墓を毎夜さ廻る修行者の。嵐に冴る鐘

の聲。なまいだ〜なまいだぶ

なまいだ〜。フシ回向をなして。過ぐ

る夜のフシ隣り。近く更けにける。月なき夜

半の夫よりも後暗き宇田右衛門。隠匿置

きし須藤彦坂二人を引具し。頬被りに顔

隠させ。火繩の火を打振り〜道を窺ひ

立寄つて。三人藁屋を押取巻き鼻息もせ

ず親ひ見て。地それだは成程サア。地來い

と。フシ悦び堤を飛んで降り。地サア〜

次郎右衛門に極まつた須藤殿。シイ高い

高い物音なせを靜にと。地深田の料土面

にべつたり摺付け〜。顔見られじと身

拵へ。足音もせず藁屋に立寄り欺し討。

所は知らず二人が切先したゝかに切付け

たり。心得たりと起上るを起しも立てず

減多切り。地次郎右衛門が身は紅堤を逆

に轉び落ち。刀を杖に突立上り。地何奴

なれば寐ごみへ踏込み。此如く傷を負せ

た。扱は最前の侍ぢやな。エ、武士に似

合はぬ道理を聞分け歸りながら。又引返

して此仕方。侍でも枕でもない。それと

も斯様に申すがお腹立たば。幾重にも御

堪忍なされて下され。右申上ぐる通り大

切な命でござる。お助けなされて下され

と。地詫ぶる聲を知邊にて物をも云はず

六郎右衛門。振上げて拜み打ち次郎右衛

門が肩先を。切先下りにせつばと切る。

切られながら切る刀に須藤彦坂手は負う

つ。互に眼に血は入つたり。堤をころこ

ろ落重つては立別れ。道うつては轉び落

ち命限りと。三重へ勸み合ふ。フシ既に其夜

も。地明方の風が連れくる鐘の聲。宇田右

衛門南無三寶と心急ぎ。地コレ〜兩人

夜明けては後日の難儀。非人めもはやく

たばつた。地サア歸られよと引立つれど

脚腰抜けて他愛なし。何と詮方やる肩に。二人を引懸け介抱し。はふく。連れて歸りける。次郎右衛門は正躰なき疵に浸込む朝風に。はつと心や付きたりけんむつくと起きて刀に縫り。ヤア汝等何處までも通さじと。地よろほひく振上げて丁と切つたる一念力。落つるを透さず取つて抑へ。ハア是は松の枝。エ、惜しやと氣も弛みうんと仰向に反返り。前後を分かぬ其有様。いちらしなんども悪かなり。夜と共寐ねば新七はかくと夢にも知らばこそ。藥や色々買調へて立歸り。見れば其邊朱に染み。砂に足跡算を亂し小屋は崩れて主はなし。はつと驚き尋ね廻る堤の陰。伏したる人はヤア兄者人。なう次郎右衛門殿こは如何に。何者所の爲ぞと駈出しては駈戻り。死骸にわつと抱き着き。まだ息もあり温味もあり。コレ新七でござります。物云

うて下されと。云ふを力に撃も立ち。新七か何故遅かつた。宵に侍二人來てた。刀がある。胴をくれよと云懸けしを。色々と訛言聞入れて歸りしが。其後寐ごみへ踏込んで此通りと。云うたばかりが精一ばい又がつくりと他愛なし。エ、今少し早く歸らば聞々とはさすまいもの。しなしたり口惜や立つて見ると見拳を握り。泣叫ぶこそ道理なれ。斯る所へ高市武右衛門庄之助誘ひ。下人に提重取持せ出で來れば。新七扱はと出向ひ。其方は宵に來た侍か。いかにもと云はせも立てず。兄の敵覺えかあらう侍やいて何とする。此小屋にゐた非人の弟。兄の敵返さぬと反打つて詰懸くる。大小からりと投出しコレ此通り抵抗いせぬ。我が云ふ詞をとつくと聞け。朋輩と詞の論に依つて。非人が軀體を檢さんと成

程最前參つたれども。大望ある仔細を聞き。武士は五と感心し罷歸る。明日は早丹州へ行くとある。是は拙者が一人の悴御舎兄の盃頂戴させ武士の魂にあやからせたく手づから切割。一種一瓶を調へ參る所に思ひも寄らぬ通さぬとは。扱は御舎兄は切られさつしやれたか。ハアはつと采るゝ詞の端々。苦しき耳に聞取つて。ヤア新七卒爾いふな聊爾すな。危き命助かつたは。其お侍の情お禮申せ。是は夫とも存せず心急ぎ卒爾な事。何が御尤も卒爾とは存せぬ。身も今少し早く參らば。斯様にはささまいもの。残り多やと立寄つて。コレ、疵は多けれど。急所を外れた療治にかかる氣違ひない。此上は數ならずとも拙者共々力となり。敵を聞出して參らせん。して當地へは何をあて何を知邊に此間。御逗留はなされた夫聞きたい。されば狙

ひまする敵は兩人。當所郡山の御家中。
加村宇田右衛門と申す方に隠匿はれあり
と。武右衛門聞いてもうよい〜。扱
は貴殿の敵といふは。須藤六郎右衛門彦

坂甚六とは申さぬか。なか〜。扱は最
前敵討の次第を聞き。兩人の奴ばらに返
討させんとエ、卑怯者めん外め。コレコ

レ御兄弟。其宇田右衛門近々殿の御供し
て。關東へ罷立つ。其内に其疵養生させ。
屹度本意を遂げさせませう。先づ我方へ

同道せん些とも氣遣ひし給ふなど。力を
付くれば新七は天にも登る心地にて。
コレ兄者人お聞きなされたかと。云へど

も兎角の詞なく世に頼みなき其風情。武
右衛門新七家來にも呼き合ひ。手負の耳
に口差寄せて大音上げ。ヤアそれに迷
ぐるは須藤六郎右衛門彦坂甚六な。待て
やらぬ待たう〜と云ふ聲に。次郎右
衛門むつくと起き。須藤六郎右衛門彦

坂甚六。卑怯者かへ〜と呼ばはり
〜。二足三足逶迤ひ往てはかつとは伏
す。武右衛門透さず聲張上げ。それへ迷
ぐるは須藤六郎右衛門彦坂な待て〜。

卑怯者と呼ばはれば又むつくと起き。
須藤六郎右衛門彦坂甚六。卑怯者返せ返
して勝負せいと。聲を力に五足六足。轉
べば呼ばはり呼ばはれば又むつくと起

き。逶迤ふ道も一筋の討ちたいばかりを
力にて。足と姿は亂れ燒き傍から力を付
燒刃。かんじんせつばを武右衛門が屋敷
へ打連れ。立つ月日旅立よしは知ら

ねども。國主の參觀御供と仰に加村宇田
右衛門。用意も忙しき家内の混雜奥口さ
わめき持運ぶ。衣類手道具挾箱跡付しと
む駄荷造る。重瀧圍の色品も。取散した
る折柄に。高市武右衛門お見舞と案内

乞うて入來れば。宇田右衛門出迎ひ。是
は〜武右衛門殿。今お暇乞に參らうと

は存じたれども。未だ用意もそこ〜故
取粉れて延引致した。さこそ〜遠路の
御供御苦勞千萬。もし御用等もござらば
お心おかれず仰せられい。是は御懸意忝

い。留守の間は萬事貴殿を頼み入る。ヤチ
よつと暇乞のお至も致したいが。爰は端
近いさ先づ奥へソレ家來ども。壁草盆ッ

お茶持て參れと座を立たせ。豫ての工
面隠し置く床の下巨燵の炭櫃引上ぐれ
ば。六郎右衛門甚六諸共退出でて。宇田

右衛門が耳に口呼けば打領き。長持に忍
ばせて蓋をしつかと錠卸す。音もひそみ
そ表は馬の高嘶き。伊兵衛佐兵衛は馬方
と姿を變へて頬被り。立ちほだかつてコ

レ親方。荷拵へが出來ましたが一服せ
うと吸付けて。家内に氣を付け見廻す
中。武右衛門立出で。コレ〜宇田右
殿。お取込の中お盃にも及ばぬ。道中お
怪我のないやう御無事でお供なされい。

最早お暇申しませう。イヤ／＼夫は殘念
用事も了へば拙者も一ツたべて参らう。
イヤもう夫には及ばぬ事。罷歸ると上り
口。下りる拍子にひよろ／＼。長持
に倒懸りうつ伏にどうと伏す。是はと驚
く宇田右衛門薬よ水よと立騒ぐ。イヤ、
お騒ぎなさるゝな。是は拙者が持病の眩
暈此間はけしからず。せつ／＼發つて迷
惑致す。ハテ夫は御難儀千萬。併し爰は
冷えますれば。御病氣も募る道理。奥へ
ござつてお休みなされドレお手を引きま
せう。イヤ、いや／＼面妖な病で人の手
が觸るは勿論。少しでも身を動かせば忽
ち息が絶えます。ハテ扱困つた病。ア
ア氣の毒や氣遣ひやと。やられぬ長持屈
託の。天窓を掻きつ立ちつ居つ。心わ
くせく身をながく。武右衛門やう／＼
頭を上げ。ゴリヤ／＼身が家来いつも
の醫者へ参つて云はうは。今日は殊外惱

みも強く難儀致す。常の鍼では参るまい
鍼を御用意なされ。只今はへお出と
いへ早く／＼と走らする。摺違うて家中
の使息もすた／＼かつつくまひ。只今
殿のお立ち故お供残らず附添ふ所。何と
して御運參ある。急いでお出と告ぐるに
ぞ。ハツと驚く宇田右衛門刀ばつ込み
駈出でしが。振返つて小者を招き。此
長持は取分け大切辻瀧に渡す氣を付け
よ。随分早うと云渡し武右衛門殿はや立
ちまするさらば／＼と云捨て。家来
引連れ急ぎ行く。武右衛門むつくと起
上り四邊を見廻し二人の馬子を近く招
き。其方達は聞及ぶ伊兵衛佐兵衛とい
ふ者な。忠節の段次郎右殿の話に聞いて
驚き入る。ハア、扱はお前が武右衛門様。
段々のお心遣ひお禮は詞に盡されず。我
も四五日以前やうやく主人に廻り逢
ひ。今日はへ参りしも宇田右衛門發足と

聞き。敵の所在知らん爲と語る半へは
い／＼。昇込む駕籠より立出づるは
醫者にはあらずで次郎右衛門。供に附いた
る弟新七。敵は何處にと目をくばり面に
見えし逸り氣を。武右衛門鎮めて急くま
い／＼。敵二人は網の鳥此長持に隠せ
しを。とつくと見届け病氣と偽り止めし
が。此儘討たば死人を切るも同然引出し
て勝負あれと。云ふに隨ひ伊兵衛佐兵
衛立寄つて錠捻切り蓋を開けば六郎右衛
門甚六諸共飛んで出で。逃げんとするを
どこへ。非道を以て親助太夫を討
つて立退き刺へ。大安寺の堤にて此次郎
右衛門が寐ごみへ踏込み。寄せんとせし
卑怯者。此場に及んで逃ぐるるとて逃がさ
うか。選れぬ所勝負々々。ヤア勝負とは
傍痛し。汝等兄弟何程に働くとも。此
六郎右衛門が片腕にも足らぬ奴打放して
了はんとはや切懸けん面魂。武右衛門押

止め待つたゞ。討手も二人敵も二人討ち討たるゝは互の運づく。双方共に聲を懸け尋常に勝負あれ。コリヤ、伊兵衛佐兵衛汝等は側から減多にぎしむが助太刀は叶はぬ。ア、イヤ主人次郎右衛門は未だ手疵養生の間もなく。對手向ひの働き心許なう存じます。ヤイ此次郎右衛門何程弱り疲るゝとも。彼等二人を討ちかねうか馬鹿盡すなと脱付くる。ヲ、さう

ちや兄者人。大切な敵討助太刀させては武士が立たぬ。兩人共に差いた刀に微塵でも手を懸くると。直に勘當蛇度申渡した。サア、勝負と双方身構へ目釘を漏し。春藤助太夫が悴次郎右衛門同苗新七親の敵いさ参ると。抜合せて二打三打戦ふ中に。甚六が左手の肩先新七に切込まれ。敵はじとや思ひけん奥を指して逃入るを遁さじやらじと追うて行く。家内の者ども驚き騒ぎ刀拔連れ駈寄るを。伊

兵衛佐兵衛が馬の鞭打立て追立て寄付けず。六郎右衛門は先を取り只一討と切付くるを心得たりと次郎右衛門。疊をはねてのめらすれば。起上つて打懸くるを丁ど受留め直に疊に引敷いたり。奥より駈出る甚六が振返つて切付くる。機みに新七刀を落し。早速の機轉巨燵の満圓を取つて投付け。刀をからまき我が身と共に

仰向にどうと捻付け乗懸り。親の敵覺えたかと双方一度に止め刀さすが兄弟念力の、本望一時に恨みも晴れ悦び勇む歸國の門出武士の鑑と移り行く。年月古き言の葉に。大和の非人敵討と聞傳へ書傳へ。*語り傳へて今の世も其名を。高く残しける。